

関西クマ事変 2024

中島 彩季（ワイルドライフマネジメント事業部 関西支社）

昨年度となる 2024 年度は、関西支社では伝説の 2010 年度に次ぐクマ捕獲対応件数を記録し、久しぶりの“クマ嵐”が起きました。他の業務にも追われるなか連日のように事務所の電話（出勤要請）が鳴り、慌ただしくがむしゃらに駆け抜けた 2024 年度。関西のクマにとってどんな年だったのかを備忘録として残しておきます。

昨今のクマ事情

この 10 数年、全国的にクマの個体数は増加傾向、分布は拡大傾向にあり、市街地での出没が増えるなど人との軋轢が増大しています。記憶に新しいのが 2023 年度です。2023 年度は秋田県や岩手県を筆頭に、北海道・東北地方で秋の大量出没が発生しました。環境省公表データを元に作成し

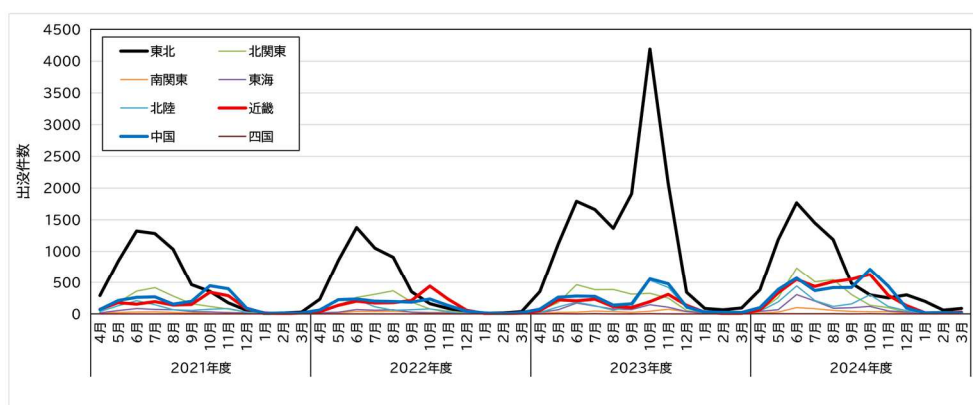


図 1 地方別ツキノワグマ出没件数の推移 (2021 年度～2024 年度)

※環境省公表資料より作成

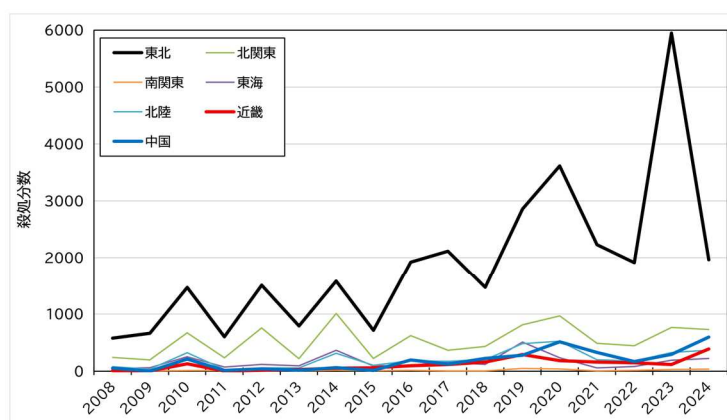


図 2 地方別ツキノワグマ殺処分数の推移 (2008 年度～2024 年度)

※環境省公表資料より作成

た、ツキノワグマの地方別出没件数および殺処分数の推移を図1、2に示します。東北では2023年度の出没・捕獲が突出して多かったことが分かります。東北森林管理局が実施している東北5県のブナ科堅果豊凶調査では、2023年度はブナの豊凶指数が2000年度以降最低で、このブナ大凶作が大量出没の引き金になったと考えられています。

この大量出没が起爆剤となり、2024年4月にクマ類が指定管理鳥獣に指定されました。また、今年度の9月には鳥獣保護管理法が改正され、“緊急銃猟”が可能となります。クマの保護管理の大

きな転換点となった2023年度ですが、関西近郊では大量出没とまでは言えない出没状況でした。

2024年度のクマ事情—関西近郊を中心に—

2024年度はどうだったでしょうか。全国の出没状況（図1）をみると、春から夏にかけて全国的に出没が多かったものの、秋は2023年度と比較して落ち着いていました。ただし、近畿・中国地方では6月から10月にかけて出没が多い状況が続きました。捕獲数の推移（図2）をみても、近畿・中国地方では2024年度は捕獲数が多かった

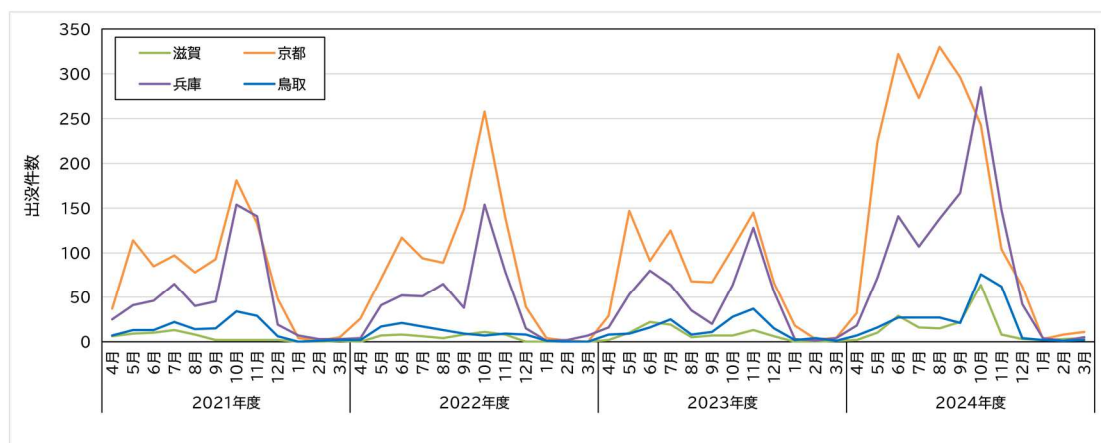


図3 関西近郊の府県別ツキノワグマ出没件数の推移（2021年度～2024年度）

※環境省公表資料より作成

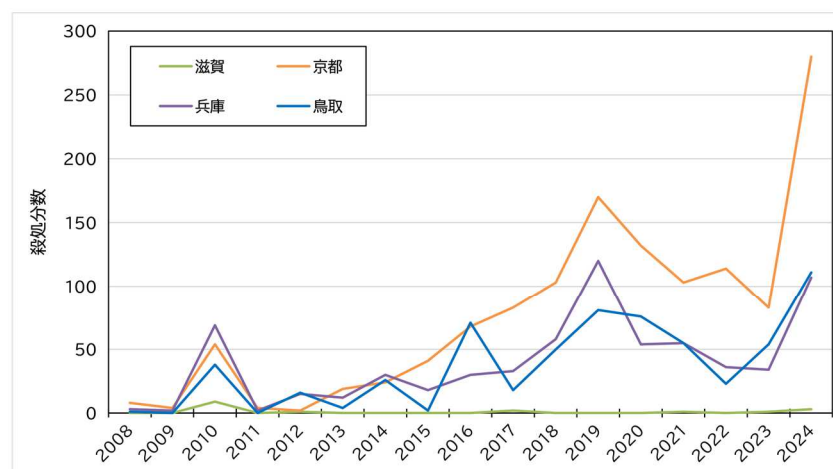


図4 関西近郊の府県別ツキノワグマ殺処分数の推移（2008年度～2024年度）

※環境省公表資料より作成

ことが分かります。関西近郊の府県について細かく統計をみると、兵庫県と京都府では初夏から出没が多い状態が続きました（図3）。鳥取県や滋賀県でも、秋に出没件数が増加しました。殺処分数をみても、2024年度は過年度と比較して頭数が多い府県がほとんどでした（図4）。

WMO 関西支社のクマ捕獲対応件数も、2024年度は220件と、2010年度の325件に次ぐ歴代2位でした（図5）。特に10月～11月の対応件数が多く、5月～9月も過年度と比較して高い水準で推移していました。また、いくつかの府県では箱わなでの捕獲が多いのも特徴でした。さらに、紀伊2県（和歌山、奈良）では歴代最高対応件数を記録しました。

2024年度、関西近郊のクマたちには何が起きていたのか？決定的な要因は不明ですが、ひとつ考えられるのは、2024年秋は堅果類の結実があまり良くなかったことです。各府県が実施している堅果類の豊凶調査では、鳥取県で「並作」、兵庫県で14年ぶりの「大凶作」、京都府で「昨年より結実の少ない凶作」という結果でした。地域差はあるものの、関西近郊では堅果類の結実量が少なかったために大量出没が発生したと考えられます。大

量出没時には、関西近郊のクマは集落のカキに大きく依存する傾向があります。とある府県では毎年出没情報から出没要因（誘引物）を分析しており、例年その大半をカキが占めています。特に大量出没時には、カキが出没要因（誘引物）となる出没情報が増加する傾向があります（未公表データ）。

ただしそのカキも、2024年秋は大凶作でした。クマの捕獲対応に行く先々で、「2024年度はカキの成りが悪い」、「集落にあるカキがほぼ全滅」という話を耳にしました。先述の府県では、2024年度は出没要因（誘引物）に対するカキの割合が低く、クリやナシ、モモなどの割合が高いという結果が得られました（未公表データ）。山にも集落にもクマにとっての食べ物が少ない状況だった可能性が予想されます。関西近郊に暮らすクマたちにとって苦しい年だったと思われます。

では、秋だけでなく夏から出没や捕獲が多かった理由は何でしょうか。クマの個体数増加や分布域拡大も背景にあると考えられますが、直接的な要因として状況から推察されるのは、夏から秋にかけてクマが利用する液果類も2024年度は軒並み凶作だった可能性です。実際、捕獲対応に行った際に「山の液果類も凶作だ」という話も聞きました。

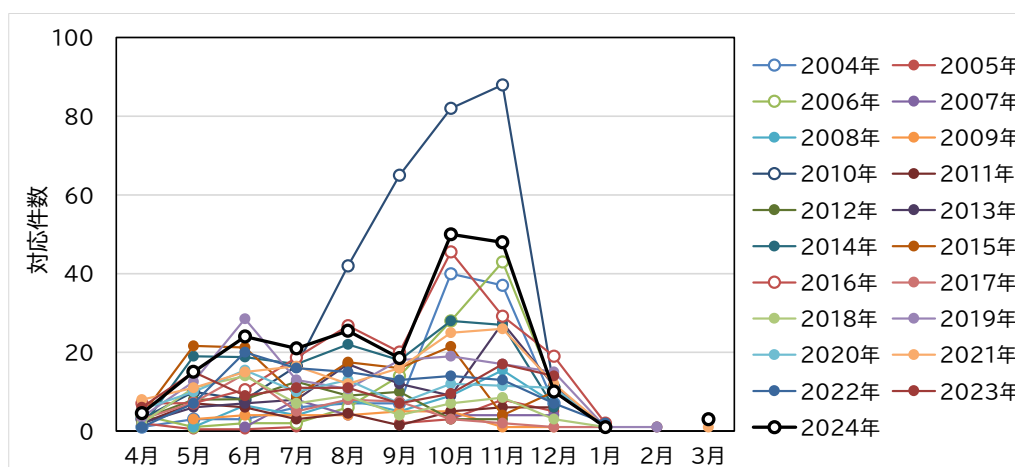


図5 関西支社における月別クマ捕獲対応件数（2004年度～2024年度）

総括すると、2024 年度の関西近郊の府県では液果類、堅果類ともに資源量が少なかったために、夏から秋にかけてクマの行動圏が拡大し、大量出沒や捕獲数増加を引き起こしたと考えられます。2024 年は全国的に年平均気温が高く、西日本では記録的な高温となりました。たまたま複数樹種の凶作年が重なることもあるかもしれませんが、このような異常気象が植物の生育に影響を与えた可能性も推測されます。

最後に

2025 年度も全国各地でクマの市街地出沒やクマによる人身事故が発生しており、人とクマの軋轢が大きな社会問題となっています。関西近郊でも、府県によっては春先から出沒が多い状況が続いています。人とクマの軋轢解消のためにも、その年にクマを取り巻く環境に何が起きていたのか、出沒情報や捕獲個体の情報を分析して出沒要因を解き明かしていくことが求められます。今回は推測の域を出ない考察になってしまいましたが、今後も多角的な視点を持って分析に努めていきたいと思っています。

参考文献

- ・クマの出沒情報（速報値）
<https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort12/syutubotu.pdf>
- ・クマの許可捕獲数（速報値）
<https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort12/capture-qe.pdf>
- ・令和 6 年度ドングリ類の豊凶調査結果とツキノワグマ出沒注意喚起について（兵庫県、2024）
<https://web.pref.hyogo.lg.jp/nk20/r6hokyochosa.html>
- ・令和 6（2024）年度『堅果類豊凶調査』成果報告書（永松、2024）
https://www.pref.tottori.lg.jp/secure/1155932/R06kenkarui_assyuku.pdf
- ・ブナ科種子の豊凶調査について（京都府、2024）
<https://www.pref.kyoto.jp/choujyu/documents/r6houkyou.pdf>
- ・2024 年（令和 6 年）の日本の天候（気象庁、2025）
<https://www.data.jma.go.jp/cpd/longfcst/annual/2024.pdf>

表紙の絵

尾瀬国立公園で夏～秋にかけて見頃のニッコウキスゲと、よくセンサーカメラで撮影される動物たちです。

人に慣れているのか、日中からクマが木道近くで目撃されるなど動物たちとの距離が近く感じられました。

野生動物との距離は一定に保っていききたいところですね。

p.s. 動物の絵が PowerPoint で描きためしていたものであったため背景のニッコウキスゲも同様に作成してみましたが、動物より目立ってるような？

島田 駿（ワイルドライフマネジメント事業部 関東支社）